慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「未知の分野」、されど、三田の伝統
Sub Title	
Author	柄澤, 行雄(Karasawa, Yukio)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2003
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.8 (2003.) ,p.44- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 「身体と医療の社会学」
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20030000-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「未知の分野」、されど、三田の伝統

柄澤　行雄

2002 年度の大会シンポジウムは、三田の社会学としては「未知の分野に切り込む思い切った企画」（藤田弘夫会長、シンポジウム担当幹事）とされる「身体と医療の社会学」をテーマとして、近年人間や社会を対象とする諸科学から幅広い関心を集めている生命、身体、医療、保健などの人間の生存にとってきわめて身近で重要な問題に関しての報告・コメント・質疑応答が、制限時間を超えて熱く行われた。

３人の報告者の報告は、いずれも社会学以外の専門領域からのアプローチではあったが、その内容は、社会学徒が真剣に組みしていかなければならない問題提起を含む視点と論点を提示するものであった。また、それに対する社会学からのコメントはそれを真剣に受けたものであり、さらに、フロアーからの質問は社会学の枠にとらわれることなく自由でリアリティな醍醐味をもつものであった。

シンポジウム全体としては、司会者の力量不足のために、そのテーマの深まりとまとまりという点で、参会者とこのテーマの企画者の満足を得られたかどうか疑問となるところであるが、それぞれ専門を異にする立場からの問題提起とそれを受け止める社会学を含めて、「病い」を臨床家・研究者としてどのように取り扱えばよいのか、という基本的・原点的な問題があらためて再確認されたのではないかと思われる。と同時に、その取り扱い方の困難さも確認できたと考えられる。その困難さの故に、今回のテーマが「未知の分野」と形容されたのかも知れない。

たしかに、三田の社会学をふり返ってみた時、医療関連分野に限れば、確たる研究の足跡を残してきたとは言えないかもしれない。その意味で、「未知の分野」であることは確かである。しかし、その中で今私たちが確認しておかなければならないこととして、故米山桂三先生のご功績がある。

私は、米山先生がご定年になられる前々年に、「定年になるから」という理由であえて久しぶりに日吉の教養の社会学の講壇にたたれた先生から、初めて社会学の世界にいざなっていただいた人間の一人である。学園紛争のさなか、しかも必ずしも体調が十分でない米山先生の講義は、ご自身の研究を回顧されながら、社会学の全体像を紹介するというものであった。先生は途中でご健康を損なわれ、その後の授業を米地實先生に託されたが、先生の講義の最後の部分で、看護と看護労働についての先生のご研究の一端を取りあげられた。先生は、昭和 30 年代に起こった国立病院の看護婦のストライキという社会的事実について、ご専門の産業社会学

の立場から強い関心を抱かれ、当時日本の社会学ではほとんど誰もが立ち入ることのなかった看護の社会学的研究に取り組まれた。先生は、すでにこの分野で先行していたアメリカの看護社会学を幅広く渉猟・整理されながら、日本の医療・看護界の社会学的な実証研究のための基本枠組みの構築を目指されたものと理解するが、そのご意思は実証的研究としてはかならずしも十分達成されなかった。また、その間に著された論稿も先生の存命中にはご自身による取り纏めはなされなかったが、先生のご逝去の後、米地先生のご尽力によって『看護の社会学』としてまとめられ、1981 年に未来社から刊行された。この著作は、管見では、看護分野に関する社会学からの纏まった著作としては、日本で初めてのものである。

今日、社会学からの医療や看護、保健分野の研究が盛んに行われるようになってきているが、逆に看護や医療分野からの社会学への接近も顕著な動きとして認められる。そのような中で、日本保健医療社会学会では、2001 年度の看護研究部会で、米山先生の『看護の社会学』の輪読会が定例で行われている。看護分野の社会学的研究は、もっぱら臨床での事例研究が多く、その理論的整理や体系化は遅れていると考えられるが、そのような中で、ようやく、科学的な体系化を意図した動きが見られるようになり、その一つの手掛かりとして先生のご研究が基本テキストとして取りあげられたのである。

米山先生が関心を示された看護界や看護労働のあり方は、それらをめぐる環境変化の中で、今日より厳しい社会的眼差しが向けられるようになってきている。それ故に、上述のように社会学からの接近も米山先生が関心を示された当時とは比べものにならないほど量的・質的な前進を見せてきている。今回のシンポジウムはそうした中での企画であった。

その企画は、たしかに「未知の分野」への挑戦であったかも知れないが、それは三田の社会学の伝統の中ではそれなりの必然性を持つものであったと考えられる。私たちは、そうした隠れた伝統を一つ一つ掘り起こしながら、その上にたって「未知の分野」に果敢に挑戦し、新たな知の伝統を創造していかなければならない。今回の大会シンポジウムは、そのことをあらためて気づかせてくれる機会となった。

（からさわ　ゆきお　常盤大学人間科学部）